人間この信じやすきもの

―迷信・誤信はどうして生まれるか―

T・ギロビッチ著
守一雄・秀子訳

弁証法をマルクスと同時にみつけだしたドイツの労働者ヨゼフ・ディーツゲンは、人間の認識にとって、誤謬は基本的であると言いきった。本書も、一見知的にみえる人間が、いかに多くの誤まった確信にまみれているかを明らかにしようと努めている。人間がさまざまな相手に対して、いかに多くの誤った認知をおこなうかのケース・スタディといえないこともない。そうありたい、そう思いたいために、それにうまくあてはまる結論を誤信するのだ。不規則で不完全な情報が、認知の誤謬をいっそう促進する。ランダムなデータや統計的な回帰が生む、偏りの錯誤と回帰の誤謬。信念や仮説に合致するものだけを選択しようとする誤信。みんなが承認している、承認してほしい思い入れから生まれる誤信。医学上の療法や超能力への誤信。

著者の誤信を防ぐ処方は、「すでに持っている仮説や信念でどんな結果でも説明づけてしまう能力」の抑制だ。(B6判・三三一頁・二九八七円・新曜社)